

お わ り に

本校では、昭和60年度から養護学校の基本テーマともいえる「発達と障害に応じた教育をめざして」を研究主題とし、副題を考えながら研究と実践を積み重ねてきた。

平成4年度からは“コミュニケーションに視点をあてて”を副題として「表現・言語」の面で検討が重ねられ、表現・言語よりも、表情・情緒的共感関係が含まれ、複数の人間がいて成立する「コミュニケーション」の方が本校教育になじみやすいという結論に至った。

研究二年次の本年度は、児童・生徒のめざすコミュニケーション像に迫るため、「授業づくり」を中心に、人と人との関わりを重視し、豊かな生活ができることを想定して、生活に結びついた題材を工夫すると共に、児童・生徒の表出行動をしっかり受けとめるために、指導者はよりよい聞き手になろうと心がけてきた。

小学部では、具体的な生活場面を大切にしながら、コミュニケーションの力を引き出せる“遊び”を学習や学習の手段として「授業づくり」をすすめてきた。

中学部では、個を生かす指導に重点をおき、豊かなやりとりのできる場面設定や個に応じた教材・教具の工夫に努めながら授業実践にとりくんだ。

高等部は、生活経験の拡大を図ることを目あてに、社会や取りまく環境に積極的に関わろうとする意欲を高めるため、生徒たちが直面するであろう生活上の問題を単元や題材としてとりあげ、授業づくりに努めてきた。

その結果、徐々にではあるが、児童・生徒一人ひとりが意欲的に自分の思いを表現しようとする姿がみられるようになったり、児童生徒集会活動がコミュニケーションの力を高める場になったりしつつあることは、この二ヶ年の実践のささやかな成果ともいえよう。

しかし、私たちの実践と研究はまだまだ試行錯誤の段階であり、来年度以降、児童・生徒と教師が共にひびきあう「授業づくり」を構築し、児童・生徒の一日一日の変容と社会的自立をめざす教育をすすめてきた。

ここに、一応のまとめを発表するにあたり、研究紀要、授業公開、研究発表等をご高覧いただき、ご批判、ご指導を賜り、それらを一つ一つ糧として更に研究を深めていきたいと考えている。

最後に、本研究に対して、労を惜しまずご指導ご助言を賜った鳥取大学教育学部渡部昭男先生、本校前中学部主事田口久恵先生、前研究主任野坂尚史先生に厚くお礼と感謝の意を表したい。

平成6年2月

副校長 岡 村 吉 明